



# むらさきいろ かべ しんじつ 紫色の壁についての真実

「プロギッシュ王はそなたらに、客間の1室を紫色にぬってほしいとのことじゃ。」おとなしいトシュギが3人の王室ペンキ屋のミーサンとオスコーンとバーシャグに説明しました。

「ですが、どのように?!」とペンキ屋が聞き返しました。

「ペンキは白がありません。」とバーシャグが付け加えました。「ここには、紫色のペンキというものがありません。」

「ノグ星の人々は紫色が大好きなので、心が広くやさしいプロギッシュ王は、みなの方が使えるように、紫色のペンキを作るようにとおおせじや。」とトシュギが答えました。「そうすれば、われわれの服だけではなく、家や馬車も紫色にすることができるからの。」

「それは、すばらしき新しい考えでございます!」思わず、ミーサンが声を上げました。

「私も、うちの壁をぜひ、紫色にしたいものだ。」と、オスコーンも言いました。「だが、どうやって紫色のペンキを作ったらいいかのう?」

「みんなもご存知のように、服を染めるのに使う紫の木の樹液の抽出作業を監督しておられるのは、トレイ伯爵じゃ。プロギッシュ王は、紫色のペンキを作るために樹液をもっとたくさん抽出する必要性について話し合うため、伯爵を今週末、城に泊まるようにと招いておられる。」とトシュギが説明しました。

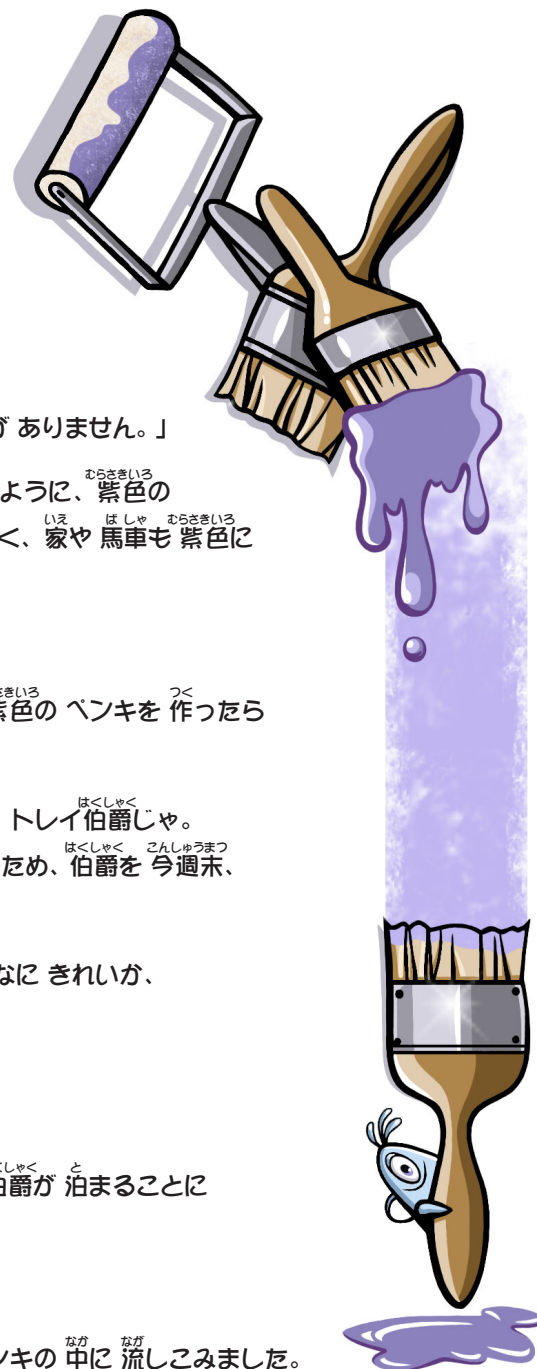
「王様は、トレイ伯爵がお泊りになる部屋の壁をすべて、紫色にすることを望みじや。それがどんなにきれいか、トレイ伯爵に見ていただくためにな。」



木曜日の朝、3人のペンキ屋達は、城の一番東側の部屋に集まりました。王様の客人であるトレイ伯爵が泊まることになっている部屋の壁を紫色にぬるためです。

「白いペンキを持ってきたぞ。」バーシャグが重いバケツを部屋の床に置きました。

「さてと、これが紫色の樹液だ。」オスコーンはポケットから大きなびんを出して、樹液を白いペンキの中に流しこみました。



やがて、バケツの中のペンキは明るい紫色になりました。3人のペンキ屋はその中にはけをひたして、壁をぬり始めました。午後までには、部屋中の壁がすっかり明るい紫色に仕上がりました。ペンキ屋達は一歩下がり、その出来映えを満足そうにながめました。

「フロギッシュ王は、さぞかし喜んで下さるだろう」と、バーシャグが言いました。

「いかに」と、オスコーンもうなずきました。「この壁は、実に美しい。」

「今夜食事が終わったら、ペンキがすっかりかわいたかどうか、私がみとどけに来よう」とミーサンが言いました。そして、3人の友は各々夕食を食べに帰って行きました。



ミーサンがもどってきた時は夕方、部屋の中は真っ暗でした。ミーサンは明かりのスイッチを入れました。

思わず、ミーサンはつばをのみました。先ほどの壁は、もう明るい紫色ではありません。事実、紫色だということさえほとんど分からないくらいなのです。白いペンキに入れた紫の樹液が足りなかったのは明らかでした。ミーサンはあわてて、ペンキ屋の友人達を探しに行きました。

「明朝トレイ伯爵が到着するまでに、壁を全部ぬり直してかわかすような時間のよゆうはないぞ。」とミーサンは言いました。「明日朝いちばんに、壁の色をぬりそこなったことを王様にお伝えせねば。」

「フロギッシュ王は、さぞかしがっかりするであろうな。」とバーシャグが言いました。

3人の仲間はしばらくの間、ほうぜんとそこに立ちつくしていました。ついに、オスコーンが口を開きました。「王様に知らせなければよいのでは。」

ミーサンはいぶかしげにオスコーンの方を見ました。「そんなことができようか？」

「カーテンをいつも閉じておけばよいのじゃ。日光がカーテン越しに差しこむようにな。」と、オスコーンが提案しました。「そうすれば、フロギッシュ王とトレイ伯爵は、紫色の壁を見るであろう！」

「ふ〜む。それならうまくいくかも知れぬな。われわれは、紫色のカーテン越しに差しこんできた光が明るい紫色のかけを壁に落としているのを見たのだ。それで、壁が実際よりもずっと明るい紫色に見えたというわけだな。」とバーシャグが言いました。

「だが、それでは不正直ではないか！」ミーサンは反対しました。「うそをつくのにはまちがっている！」

「いや、うそをつくわけではない。」とバーシャグが言いました。「われわれは真心をこめて、壁を紫色にぬったと王様に伝えればよいのだ。確かにわれわれはそうしたのだから！ただ、カーテン越しに差しこんできた光のせいで、思いがけなく紫色があざやかに見えていたことに気づかなかっただけなのだ。」

「わ、私は・・・うそはつきたくない。」とミーサンが言いました。

「バーシャグと私が説明するから。君はただ、だまっていればよい。」とオスコーンが言いました。

「それでよかろう。」とバーシャグも同意しました。



「何と見事な色と出来映えじゃ！」紫色の壁を見たトレイ伯爵は、感嘆の声を上げました。

「この立派な仕事をしたベンキ屋の面々に、ぜひ、お目にかがって下され。ミーサン殿とバーシャグ殿とオスコーン殿じゃ。」とプロギッシュ王様は言いました。

「みなさんは、実に素晴らしい仕事をされた。」と、トレイ伯爵が言いました。

王様とトレイ伯爵が立ち去ると、オスコーンが言いました。「分かったぞ。たやすいもんさ。プロギッシュ王とトレイ伯爵は、ありのままの壁を気に入って下さったのだ。」

「だが、今夜太陽がしずんだ後、トレイ伯爵が部屋の明かりをつけたとたん、壁はもはや紫色には見えなくなるのだぞ」とミーサンは言いました。

「では、バルコニーの明かりをつけ、カーテン越しに光が部屋に差しこむようにしよう。」とバーシャグが言いました。

「何かがうまく行かなくなるに決まるとる。正直に言うべきだろう。王様に、われわれのあやまちを伝えないと。」とミーサンが言いました。

「それはならん!!!」オスコーンとバーシャグがさげびました。



「バルコニーの明かりが消されないように、配線をし直すのじゃ。」とオスコーンが言いました。

バーシャグも賛成しました。ミーサンは、物事の展開に大きな不穏を感じながらも、反対するのをあきらめてしまいました。



その夜、トレイ伯爵が休むために部屋にまでとってみると、バルコニーの明かりがカーテンの向こう側でこうこうと輝いていました。スイッチを切っても、こわれているのが、明かりは消えません。

トレイ伯爵はカーテン越しに差しこんでくる明るい光から目をそらそうとして、一晩中寝つけずにごろごろと寝返りばかり打っていました。あくる朝トレイ伯爵は、赤くはれぼったい目で朝食にやって来ました。

「夕べは全く眠れなかったご様子ですな。」あいさつをすると、プロギッシュ王が客人に言いました。

「バルコニーの明かりのスイッチがこわれているようでして。明るい部屋でねるのには、なれておらんのですよ。」と、トレイ伯爵は答えました。「だがしがし、紫色の壁は一晩中ながめて楽しみましたぞ。」



朝食がすむと、プロギッシュ王は3人のペンキ屋達を呼び出してたずねました。「そなたらは、トレイ伯爵が来られる前の晩に、客室におつたはずじゃ。バルコニーの明かりが消えないことに気づかなかったのか？ もし気づいておつたなら、どうして直さなかつたのじゃ？ トレイ伯爵は、部屋に差しこんでくる明かりがまぶしくて、一晩中眠れなかつたそうなのだが。」

2人の友人が返事をする間、ミーサンはだまって立ちすくんでいました。

最初にオスコーンが切り出しました。「こわれていることには気づいたのですが、それを直す電気技師が見つからなかつたのです。」

バーシャグも言いました。「それで、私が直しました。直つたと思つていたのですが。」

「はい。直つたとばかり思つておりました。」と、オスコーンも言いました。

プロギッシュ王はミーサンの方を見ました。「ミーサン殿。そなたは静かじやの。何か言いたいことは？」

ミーサンは、もはやだまっていられませんでした。そして、仲間達がギョツとしたことに、紫色のペンキがうす過ぎたことを王様に話してしまいました。その間、2人の友人は恥じ入つてがつくりしていました。ミーサンとバーシャグとオスコーンはみな、最初から真実を話さなかつたことで、王様にあやまりました。

「友よ。」と王様は言いました。「問題を報告する代わりに、あやまちをかくそうとして不正直つたことは、悲しいぞ。われわれの国は常々から、たがい同士の正直さを喜びとしてきたではないが。ちがうかの？」

「はい、ごもつともでございます、王様。」と、ミーサンが答えました。

「全くその通りでございます！」とオスコーン。

「私共の行動を、心より恥じております。」バーシャグも言いました。「どうか、おゆるしを。物事を正すために私達にできることは、何でもお申しつけ下さりませ。」

「まずはトレイ伯爵に、ペンキについて、本当のことをお話しするのじゃ。そして、自分達のあやまちをかくすために明かりのスイッチに細工をしたことも、わびるのじゃ。お気の毒に、トレイ伯爵は一晩中、一睡もできなかつたのじゃぞ。」と王様は言いました。

「本来なら、今日はそなたらの休みの日だが、午後にはもう1度、城のもう1室の壁を紫色にぬるのじゃ。そのペンキがかわいたところで、トレイ伯爵にその部屋に移つていただろう。」

3人のペンキ屋は、トレイ伯爵にあやまりに行きました。トレイ伯爵は、3人の謝罪を快く受け入れてくれました。







3人のペンキ屋達は、今度は先回の3倍の量の紫色の樹液を白いペンキに混ぜました。そして、カーテンがちゃんと開いたままであるよう、急を押ししました。ペンキをぬり終わると、カーテンが開いたままでも、壁は美しく明るい紫色に仕上がっていました。

トレイ伯爵は、木から紫色の樹液をもっとたくさん抽出するため、職人をもっとやといました。やがて、ノグ星の家々の室内の壁は、様々な濃さの生き生きとした紫色になりました。

「プロギッシュ王、万歳！」 ノグ星の人々がさげびました。「紫色のペンキを下さって、ありがとうございます！」

「プロギッシュ王、万歳！」 ミーサンも声を大にして、2人の友人に言いました。「われわれに真のあわれみを示して下さい。プロギッシュ王、万歳！」

「王様は、真実を話す大切さを思い出させて下さった。」と、オスコーンも言いました。

「われわれが、いつも正直さで知られる者でありますように。そして、二度と、あやまちをかくすためにうそをついたりしませんように！」と、バーシャグも言いました。

「その罪をかくす者は栄えることがない、言い表してこれをはなれる者は、あわれみをうける。」 (口語訳聖書、箴言28:13)

ミーサンが王様に本当のことを話してくれた時は、ほっとしたよ。真実をかくすためにうそをつくのはいやなことだもの。1度うそをつくと、さらにまたうそをつくようになってしまおうからね。

自分のあやまちをかくそうとして、うそをつく誘惑にかられたことはあるかい？ 本当のことを話すのはつらいかも知れないけど、いったん話してしまえば、気が楽になるし、話して良かったって思えるよ。

